

特定非営利活動法人 日本免疫学会
平成 23 年度 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	梅本 英司	会員番号	0021542
申請者の所属・職名	大阪大学大学院 医学系研究科 免疫動態学・助教		
出席会議名	Keystone Symposia (chemokines and Leukocyte Trafficking in Homeostasis and Inflammation)		
発表論文タイトル	Constitutive pDC migration to the splenic white pulp is cooperatively regulated by CCR7 and CXCR4		

実施結果:

このたびは、Tadamitsu Kishimoto International Travel Award を賜り、誠にありがとうございます。

本学会は 2012 年 1 月 8 日から 13 日まで、アメリカ合衆国コロラド州 Breckenridge にて開催されました。私は、大阪大学医学系研究科、宮坂昌之教授のご指導のもとで進めていた、定常状態における形質細胞様樹状細胞 (pDC) の脾白脾髄への移動を制御するケモカイン受容体について、ポスター発表を行いました。発表では関連分野の他の研究者と活発に議論したり、本研究で使用した遺伝子欠損マウスの作製者らからコメントを頂いたりするなど、実り多いものとなりました。また、著名な研究者に日頃の疑問を積極的に投げかけることができたのも収穫でした。

本学会の特徴として、特に今回イメージング技術を活用した発表が多かったことが挙げられます。Eugene E. Butcher は、末梢で抗原を取り込んだ $CD11c^+B220^+CCR9^+$ pDC が胸腺に移動し、抗原特異的な central tolerance の成立に関与するというデータや、骨髄中の $CD11c^+B220^+CCR9^-$ 細胞集団には、腸管粘膜固有層に選択的に移動し、 $CD103^+$ DC に分化する μ DC (mucosal DC) 前駆細胞が含まれるという知見を発表し、また、Sussan Nourshargh は炎症部位への白血球浸潤に、血管内皮細胞を裏打ちする周皮細胞 (pericyte) が重要な役割を果たすという概念を提示しました。腸管や肺における細胞動態解析も急速に進展するのも感じました。例えば、Guy Shakhbar は二光子顕微鏡を用いて、 $CD103^+$ DC が腸管上皮の細胞間を活発に動き回り、管腔面のサルモネラ菌を取り込む様子を捉えていました。これらの研究発表を通じ、今後、免疫細胞が機能を発揮するために必要な「場」およびそれらの相互作用を理解することがますます重要になると痛感しました。

また、今学会を機にスイスの研究者と共同研究を行うことも決まりました。今後、さらに飛躍できるよう、本学会で受けた刺激をもとに精進していきたいと考えています。